

◇ 国 語

国 1-1～国 1-18 まで 18 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昭和二十一年（一九四六）七月に日本国憲法が成立し、天皇は日本国の象徴、日本国民統合の象徴となり、日本は国民主権の国になりました。

小説家の坂口安吾は「醜の御楯と出で立つ我は」（『万葉集』巻二十・四三七三）などの歌によって宣揚された「忠君愛国」の道徳が、人間の生きようとする欲望を抑え込んだことなどの誤りを、シニカルに告発しました（ア 銀座出版社、昭和二十二年）。

しかし、敗戦による虚無感と戦争からの解放感に満ちた混沌の中で、『万葉集』は否定されるのではなく、むしろ多くの人々にカツボウされました。昭和二十一年から三十年頃にかけて、厳しい出版事情であったにもかかわらず、『万葉集』に関する書物が続々と出版されました。新刊ばかりでなく、戦前のものも重版されました。

昭和二十七年に佐佐木信綱を会長としてホソクした、『万葉集』『古事記』『日本書紀』などの研究のための公的学会「上代文学会」の第一回講演会は演壇にまで聴衆が座るというセイキョウぶりを見せました。

昭和二十二年十月開催の「朝日古典講座」（朝日新聞社主催）の講演録『万葉の窓』（朝日新聞社、昭和二十四年）の序文は、

流れてゆく時のまにまに、人人があからさまに放った多くの悲痛、哀憐、怒号、闘争、感激、喜悅、恋愛、別離などそれぞれの声は、美しい様相を描いて民族生活の歴史のなかに花と咲いた。

と書き始め、その中でも『万葉集』は、老若男女や階級の別もなく、都を中心に国の隅々からの歌を集めた「国民的な歌の花束」であり、古い『万葉集』が含む新しい感覚は、現代の読者の心の中の新しさに通ずる」と述べています。

ポツダム宣言を受諾して、「民族の滅亡」（昭和天皇の「終戦の詔書」）を辛うじて免れた日本人々は、「民族」の誇りと、「国民」としての抛り所を『万葉集』に求めたのでした。

『万葉の窓』では、額田王が近江行幸の時に宇治で作った歌（巻一・七）、柿本人麿の旅の歌（巻三・二五五）、

おおもものさかのうえのいらつめ
大伴坂上郎女の恋歌や挽歌などの心と表現を丁寧ほんかに解説しています。旅、恋、死別の中の古代の人々の心に、講座の聴衆は イ のです。

この時期に出版された『万葉集』に関する書物の執筆者の多くは、戦前以来の国文学者や歌人たちでした。彼らは「将来の建設」(「終戦の詔書」)を新たな目標として『万葉集』の研究と普及に取り組んだのでした。

昭和三十年頃からは、戦後の新しい『万葉集』研究の成果が公開され始めます。「抒情詩としての『万葉集』」、「文字の歌としての『万葉集』」、「東アジアの中の『万葉集』」など、文学としての『万葉集』を多角的に捉えようとしています。

しかし、品田悦一しなだよしかず氏も指摘しているように(『万葉集の発明』)、「日本人の祖先が、天皇から庶民に至るまで、素朴な心をありのままに力強い調べで歌った「国民的な歌集」」という万葉像が、いまだに強い影響力を持ちつつづけているのも事実です。

実際には『万葉集』は「天皇から庶民に至るまで」の歌を集めた歌集ではありません。あくまでも天皇・貴族を中心とする歌集です。『万葉集』の半数を占める作者未詳歌も、その中心は、平城京へいじょうきやうに暮らす中・下級官人が作者です。東歌あずまうたにしても、東国の有力な首長層の歌や、首長層のもとで歌われた歌を短歌形式に整えたものです。

それに、東歌も防人歌たきもりうたも「一般庶民」の素朴な歌として集められているわけではありません。農民出身の兵士にいたるまで、中央の文化である「やまと歌」がシンクトウシントウしていることを示すことで、本来中央とは言語や文化が異なり、なおかつ、大きな軍事力の供給地であった東国を、政府が掌握していることを示そうとしたのです。もちろん、『万葉集』の時代には「国民」という概念はありませんでした。

『万葉集』は「国民的な歌集」ではありませんし、また純然たる「抒情詩集」と捉えるのも違ってきます。『万葉集』は舒明天皇に始まり聖武天皇しょうむに至る皇族の〈歴史〉を、「やまと歌」によって描こうとした歌集なのです。

それでは、現代の私たちはどのように『万葉集』を読めばよいのでしょうか。

この時に参考となるのが、戦争下の昭和十八年（一九四三）七月発行の「短歌研究」（第十二巻第七号）に掲載された風巻景次郎の「古典研究の志向」という文章です。

この号には、アリューシャン列島のアツツ島守備隊の全滅を、『万葉集』のことばでソウチヨウに悼む歌が数多く収められています。

そのような中で、風巻は「時間・空間が異なっても世界は己と同じ考え方をしているはずだ」と考える十九世紀の合理主義を、自己の原理の強要と批判します。『万葉集』の歌を、現在の人間と同じ心から生まれたものと見て、現代よりも「素朴」で「健全」であるとする考え方も、十九世紀の合理主義にすぎないと切り捨てます。そして、先入見と主義を捨てて、改めて主体的知性的に古典に対面する必要を説きました。

近代、そしてその源にある賀茂真淵の万葉像の最大の問題は、古代と現代を無媒介に結びつけたことです。敗戦後まもない時期から、改めて『万葉集』に向き合うために苦闘した西郷信綱氏のように（『日本古代文学』、貴族制に支えられた古代の天皇と、「国民」を基盤とする近・現代の天皇の違いを知性的に見つめ続けることが重要となります）。

また、「万葉集と日本人」の千二百年の歴史を振り返ると、政治的危機のたびごとに、『万葉集』は理想の（古代）とされてきました。しかし、風巻の見方に立つと、この思考法自体も ウ のです。

今日、『万葉集』は英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語・スペイン語・ノルウェー語・チェコ語・スロバキア語・ロシア語・ルーマニア語（国際交流基金の「日本文芸翻訳検索」による）や、中国語・韓国語に翻訳され、さまざまな国の人々が読み始めています。

ドナルド・キーン氏は、『万葉集』について次のように述べています（『海外の万葉集』）。

……日本のあらゆる詩歌集の中で『万葉集』は一番西洋人を感動させるはずであって、英訳で読んでもそれ以後の日本の歌にない説得力を有している。『万葉集』に出ているテーマ（妻や子の死、初恋、貧困な生活の苦しみ、いくさへ行

く兵士の感情等々)は普遍的なものばかりであつて、詩に興味を持つているのに『万葉集』に興味を持たないような人は想像が出来ない。

また、『万葉集』を「古典」や「伝統」であるよりも新鮮なことばの魅力に満ちた「エ」文学」と捉えるリービ英雄氏は、山上憶良やまのうえのおくらの「老身重病の歌」ろうしんじゆうびょうの反歌はんか(巻五・九〇〇)が「十九世紀のロンドンに住んだイギリス人が書いたと言つても少しも疑われないほど、何の抵抗もなく英語詩にすぐ置き換えられる」(『英語でよむ万葉集』)と言つています。

『万葉集』は決して「日本人にしかわからない」ものではないのです。人間とは何か、人間が生きるとは何か、を問いかけた普遍的な文学として、世界の人々に開かれたものなのです。私たちも普遍的な文学に出合う時、それが外国文学であるか日本文学であるかに関係なく、深い感動を覚えていきます。

同時に、普遍的な文学は抽象的に存在してはありませぬ。普遍性は「エスニシテイ」(民族性)や「ネイション」(日本文語では「民族」「国民」と二通りに翻訳されています)を通して表されます。

実際に『万葉集』の歌を英訳すると、その歌が表現しようとしているものが、英語に比べて曖昧あいまいでゆるやかな日本語の論理に深く関わっていることがわかります。例えば、主語を明示しない日本語の特徴によって、〈私〉一人ではなく、〈私たち〉の心を表現しています。そして、若いアメリカ人学生が言うことには、この曖昧でゆるやかな表現は、説明的に英訳しなくとも十分にその心が伝わるのです。

「エスニシテイ」や「ネイション」を大切にしながら、それを絶対化せず、常に知性的に捉える目を持ち、普遍的な文学として『万葉集』を読んでゆくこと、それによって世界の文学や文化に貢献してゆくことが、これからの『万葉集』の読み方であると私は思います。

(小川靖彦『万葉集と日本人』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A カツボウ

- ① 一部をカツアイする
- ③ エンカツに事を運ぶ
- ⑤ 事務をトウカツする

② カツロを見いだす

④ 資金がコカツする

1

B ホツソク

- ① 返済をトクソクする
- ③ ソクバクされた時間
- ⑤ ソクザに答える

② ソクセキを残す

④ シツソクして墜落する

2

C セイキョウ

- ① 事態をセイカンする
- ③ セイソな女性
- ⑤ 祝宴のセイカイを祈る

② 許可をシンセイする

④ セイコウを極めた作品

3

D シントウ

- ① キンジトウを打ち立てる
- ③ トウチ法による表現
- ⑤ 時代をトウエイした映画

② 美にトウスイする

④ トウテツした論理

4

E ソウチヨウ

- ① ピアノをチヨウリツする
- ③ 敵をチヨウハツする
- ⑤ 税金をツイチヨウする

② 経済のセイチヨウリツ

④ シンチヨウに行動する

5

問二 空欄

ア

に入る坂口安吾の文明批評作品を、次の①～④の中から一つ選べ。

6

① 『陰翳礼賛』

② 『墮落論』

③ 『善の研究』

④ 『仮面の告白』

問三 空欄

イ

に入る、聴衆の様子を表す語句として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

7

① 目を見張った

② 耳を澄ました

③ 黙して語らなかった

④ 気を引き締めた

問四 空欄

ウ

に入る最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

8

① 条件付きで認めざるを得ない

② 批判的にとらえ直す必要がある

③ あながち不当とは否定しきれない

④ 歴史的には意味があると評価できる

問五 空欄 エ に入る最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 和歌
- ② 未来
- ③ 翻訳
- ④ 世界

9

問六 傍線部 (一)・(二) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中から一つずつ選べ。

(一) 「時のまにまに」

- ① 時があまりにも速く過ぎ去って
- ② 時間が過ぎるのに任せて
- ③ 時を止めることが出来ずに
- ④ 慌ただしい時の合間に

10

(二) 「辛うじて」

- ① やつとのもので
- ② つらさを経て
- ③ さいわいにも
- ④ 不安はありながらも

11

問七 傍線部(二)の『万葉集』は「国民的な歌の花束」であるという見方に対する筆者の考えとして、最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

①『万葉集』は、天皇をはじめ古代に活躍した歌人の歌だけでなく、作者の分からない歌も収めている。作者不明の歌は、無名の庶民の歌と考えるべきであるので、「国民的な歌の花束」という見方もあながち間違いではない。

②『万葉集』の研究が進んだ現代では、この見方は否定されるべきであるが、昭和二十年代に「国民」という概念が普及した当時にあつては、「国民的な歌の花束」だと考えられたことは正しい見方といえる。

③第二次世界大戦後に、日本の「国民」の精神的な支えとして『万葉集』が研究され、広く人々に読まれて来たのは事実である。しかし、『万葉集』は、当時の天皇や貴族の歌を集めたもので、「国民的な歌の花束」との見方は正しくない。

④日本国憲法の成立以降、「国民」の意味は変化した。しかし、今なお天皇から中高生まで幅広い層の人々が短歌を詠んでいる。現代短歌の源泉ともいえる『万葉集』を「国民的な歌の花束」と考える人が多いのも仕方ない。

問八 傍線部(四)で、筆者は賀茂真淵が「古代と現代を無媒介に結びつけた」と批判しているが、何が問題なのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

①時代の異なる古代社会の中で生まれたという成立の背景を考慮せずに、真淵の生きた社会の問題と結びつけて『万葉集』を論じたことが問題であるという。

②真淵は『万葉集』の注釈書を著したことで有名であるが、『万葉集』の和歌を解釈する際に、自分の感性に結びつけて解釈したことが問題であるという。

③真淵は『万葉集』調の和歌を多く読んだが、時代の異なる和歌本来の意味を無視して自作に取り入れたことが問題であるとしている。

④真淵は立派な万葉学者であつたが、先行研究を無意味と考へて、同時代の研究のみを参考にして自説を説いたことが問題であるという。

12

13

問九 本文の論旨と一致するものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

14

15

- ① 戦争中に『万葉集』に収められた防人の和歌が誤解されて、「忠君愛国」という道徳に結びつけられたことは大きな誤りとして告発すべきである。
- ② 戦時中、『万葉集』によって戦意を宣揚された国民が、人間の生きようとする欲望を押さえ込まれたことに、敗戦後強く反発し、『万葉集』を否定した。
- ③ 最近、多くの国で『万葉集』が翻訳され、文化が違っても共感・感動できる普遍的な文学だと好評を得ているが、和歌の曖昧な表現を完全に翻訳することは難しい。
- ④ 『万葉集』成立時の有り様を理解し、日本独自の文化を大切にしつつも、世界に通じる内容を持つ文学として読むことが求められている。
- ⑤ 『万葉集』は観念的・普遍的な「抒情文学」ではなく、「エスニシテイ」（民族性）や「ネイション」（国民）を通してあらわされた日本独自の文学として読まねばならない。
- ⑥ ドナルド・キーン氏をはじめとして、日本のあらゆる歌集の中で、『万葉集』ほど人間の本質や真情を表現した感動的な文学はないと評する人は多い。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

いま、島田清次郎という小説家のことを知っているのは、近代文学を専門にしている研究者くらいであろう。その『地上』（大正八年）という作品が天下の話題になったのを知る人はもうほとんどなくなろうとしている。

島田清次郎は大正の文学青年から見て、まさに天才であった。それを疑うものはすくなくかつた。それがどうであろう。僅か六十年にして、ほぼ、完全に忘れられてしまった。当時としては、むしろ、夏目漱石の文学について疑問をいだくものが多かつた。批判もすくなくかつた。それがいまでは国民文学として、近代文学においてヒケン^Aしうるものなしといわれるまでになつてい

る。
大正のチュウヨウ^Bにおいて、現在のことを予測し得たものはほとんどなかつたと言つてよい。流行というものはそれくらい人の目をくるわすものである。「現代^C」はいつの時代においてももつとも不可解である。古い時代のことにはよくわかる。あまり大きな見当違いはもうおこらない。それなのに、何でも直接に見聞して知っているはずの現在のことが実にわからない。まれにわかつたと思うと、とんでもない判断をしてしまう。

文学史家はこのことをよく承知している。ときに、現代文学史を試みる人もないではないが、だいたいの史家は、現代に近くことをおそれる。三十年、五十年前のところまで、筆を止めるのが普通になつてい

る。それでも、新しいところへさしかかるにあたつては、「まだ、これらの作家、作品は、時の試練を^三経ていない。いま不用意にその^三軽重をあげつらうことは慎しまなくてはならない」といった意味の常套句^{じょうとうく}をかならずと言つてよいほど用意しているものだ。

その裏には、おびただしい失敗例がごろごろしている。なぜ、いちばんよくわかつているはずの目前のことがそれほどにわからないのか。ひとつには、それまでの考え、それにもとづく^三流行の色眼鏡^三をかけて見ているからである。まわりがアかけている眼鏡をはつきり一時的なものと看破することは難しい。そのメガネ越しでは、新しいものがあらわれても見えない。

たとえ見えても、カイキ^カな姿にうつるであろう。イ 真の価値を見ることはできない。

もうひとつは、新しいものが、あまりにも新しいことが、本来の姿でない姿をさせていることがある。大工は生木で家を建てる。新しい木はいいようであるが、建築材料にはならない。乾燥してくると、ゆがむからである。変形する前の生木は、木材としては、いわば、仮の姿である。時間をかけて変わるべきところは変わらせてからでない、家を建てることはできない。

新しい文学作品についても、ほぼ同じことが言える。作者の手を離れたばかりの作品は、生木に当る。それは文学史という家を作るにはまだ新しすぎる。『時の試練』を経させて、風をあて、乾燥させる必要がある。

時間が経てば、たとえ微少でも、風化がおこる。細部が欠落して、新しい性格をおびるようになる——これが古典化の過程である。原稿のときとまったく同じ意味をもったままで古典になったという作品は、古今東西、かつてなかったはずである。かならず、時のふるいにかけてられて、落ちるものは落ちて行く。

ときには、作品そのものが埋没してしまうことがあるかもしれない。発表当時は、天下の耳目をそばだたせた島田清次郎『地上』が半世紀もたたないうちに、まったく忘れられてしまったのはその一例である。湮滅^{いんめつ}こそ免がれはしたものの、生木のときとは、大きく違ったものになったという場合もないではない。

スイフトの『ガリバー旅行記』は十八世紀の作品である。もともとは当代の政治情況に対するきびしい諷刺^{ふうし}であった。ところが、次の時代からすでに、読者にわからないところが出てきて、これは時代が下るにつれてますます多くなった。一般に諷刺というものは、風化が急速に進むのが一般である。やがて、『ガリバー旅行記』を諷刺として読む人はなくなった。そこでこの作品は忘れ去られてもよかったのである。

ところが、新しい読み方が行なわれるようになって、これをリアリズムの童話に変身させた。それとともに、『ガリバー旅行記』の古典化が起った。政治諷刺であることをやめてはじめて、世界的なひろがりの読者層をもつことができるようになったのである。

『時の試練』とは、時間のもつ風化作用をくぐってくるということである。風化作用は言いかえると、忘却にほかならない。

古典は読者の忘却の層をくぐり抜けたときに生れる。作者自からが古典を創り出すことはできない。

忘却の濾過槽ろかそうをくぐっているうちに、どこかへ消えてなくなってしまうものが **ウ**。ほとんどがそういう運命にある。きわめて少数のものだけが、試練に耐えて、古典として再生する。持続的な価値をもつには、この忘却のふるいはどうしても避けて通ることのできない関所である。

この関所は、五年や十年という新しいものには作用しない。三十年、五十年すると、はじめてその威力を發揮する。放つておいても五十年たってみれば、木は浮び、石は沈むようになっていく。

これを自然の古典化とするならば、ジンイジンイによる古典化作用ともいうべきものもある。自然の古典化は、長い時間の流れを必要とする。放つておいても古典化は起るかわりに、一生かかっても完了しないおそれがある。もっと短い時間で、時の試練を完了させることはできないものか。

とくに努力しなければ、古典化には三十年も五十年もかかる。その時間を短縮するには、忘却をソクシンソクシンすればよい道理である。自然に忘れるのにまかせておかないで、忘れる努力をする。頭の中をたえず整理し、忘れやすいようにするならば、忘却の時間は **エ** 短縮できるであろう。

一時の思いつきは、当座は、いかにもすばらしい。しかし、それは、生木のアイディアである。早く水分を抜いてやらないといけない。メモに書く。書けば安心する。安心すれば忘れやすい。しばらくして、見返す。ほんの十日か二週間しかたっていないのに、もう腐りかけているのがある。どうしてこんなことを **オ** 書きつけたりしたのかと首をひねる。風化は進んでいるのである。

(略)

忘却は古典化への **甲** ということである。なるべく早く忘れた方がいいと言っているのも、個人の頭の中で、古典的で不動の考えを早くつくり上げるには、忘却が何よりも大切だからにほかならない。

思考の整理には、忘却がもっとも有効である。自然に委ねておいては、人間一生の問題としてあまりにも時間を食いすぎる。

それかといって、生木の家ばかりいくら作ってみても、それこそ時の風化に耐えられないことははっきりしている。

忘れ上手になって、どんどん忘れる。自然忘却の何倍ものテンポで忘れることができれば、歴史が三十年、五十年かかる古典化という整理を五年か十年でできるようになる。時間を強化して、忘れる。それが、個人の頭の中に古典をつくりあげる方法である。

そうして古典的になった興味、着想ならば、かんたんに消えたりするはずがない。

思考の整理とは、いかにうまく忘れるか、である。

(外山滋比古『思考の整理学』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A ヒケン

- ①材料費をケンヤクする
- ②たまったアンケンを片付ける
- ③キョウケンの外野手
- ④オンケンな性格
- ⑤問題がサンケンする

16

B チュウヨウ

- ①チョウヨウの序
- ②シヨウマッセツにこだわる
- ③ヨウシヨクが衰える
- ④最もカンヨウな課題
- ⑤心がドウヨウする

17

C カイキ

- ①キバツな発想
- ②キエイの新人
- ③俳句のキゴ
- ④計画がキドウに乗る
- ⑤健康をキネンする

18

D ジンイ

- ①他人にイキヨする
- ②イサイを説明する
- ③表紙のイシヨウを替える
- ④ユウイの人物
- ⑤イシヨクの組合せ

19

E ソクシン

- ①返事をサイソクする
- ②問題をシユウソクする
- ③その後のシヨウソクを尋ねる
- ④ソクタツ郵便
- ⑤時勢にソクオウする

20

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中

からそれぞれ一つずつ選ぶ。

ア ①ひとえに ②ひたすら ③ひとしく ④ひねもす 21

イ ①とうてい ②ともかく ③とうから ④とうとう 22

ウ ①あわただしい ②おびたしい ③かまびすしい ④かいがいしい 23

エ ①みずみずしく ②いちじるしく ③そらぞらしく ④たどたどしく 24

オ ①ふてぶてしく ②まがまがしく ③ごとごとしく ④にぎにぎしく 25

問三 空欄 甲 に入る最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選ぶ。

26

- ①登龍門
- ②真骨頂
- ③桃源郷
- ④一里塚

問四 傍線部(二)・(三)・(四)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(二)「軽重をあげつらう」

- ① 重さや軽さだけで判断する
- ② 二つを比較して論評する
- ③ 出来の良し悪しを言い立てる
- ④ 間違いを指摘する

27

(三)「流行の色眼鏡」

- ① 一時的な思い込みや偏見
- ② はやりのサングラス
- ③ はやりすたりの基準
- ④ 常識的な考え方

28

(四)「耳目をそばだたせた」

- ① 関心から外れた
- ② 注目を集めた
- ③ 目を見張らせた
- ④ 注意をそらせた

29

問五 傍線部(一)「現代」はいつの時代においてももつとも不可解である。」と筆者が主張するのはなぜか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

30

- ① 自分と同時代の出来事は主観でしか判断できず、客観性が保てないから。
- ② 時代が同じでも国や地域、民族によって生活風習や嗜好が異なるので、世界共通の価値というものは存在しないから。
- ③ 現代の価値観は一時的なもので普遍性がなく、真の価値は時間の経過をへて初めて現れるものだから。
- ④ 一時的な思い付きは目新しさで人びとの注目を集めるが、すぐに次の流行が生まれ、主流の座を取って代わられるから。

問六 この文章で筆者が述べている内容と異なるものを、次の①～④の中から一つ選べ。

31

- ① 現在では国民文学として位置づけられている夏目漱石の作品は、発表当時はさほど評価が高くなく、文学としての価値を疑う人も多かった。
- ② 『ガリバー旅行記』は政治批判として書かれたが、時代が経つにつれて理解できないところが多くなり、作品本来のテーマとは別の面白さで評価されるようになった。
- ③ 大工が生木で家を建てないのは、それがとても高価で全体の建築費がかさみ、受け取る賃金の中に占める材料費がかかりすぎるためである。
- ④ 思考を上手に整理するためには、自然に委ねるよりも積極的に忘れることの方が効果的である。古典は読者の忘却の層をくぐり抜けて生まれるのである。

問七 本文につける「見出し」として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 温故知新
- ② 時の試練
- ③ 諷刺と風化
- ④ 自然忘却

32